

# 国際交流情報



大学美術教育学会国際交流委員会  
2011年 3月23日(水)

## 第4号

発行：藤江 充〔理事長／愛知教育大学〕  
編集：山口喜雄〔委員長／宇都宮大学〕

特集

## 韓国学会、台湾・フィリピン交流情報

2011年3月11日の東北・関東大震災で被災された皆様に心からお見舞い申し上げます。

第4号はアジアの情報です。前号の藤江理事長提案を受けて企画した大学美術教育学会と韓国美術教育学会との学術交流の経緯と課題を考察した安東恭一郎委員、韓国美術教育4学会を各々のホームページ記載内容の解説ほかの情報をもとめた鈴木幹雄委員の両記事を読む

と現在の韓国と日本の学術的な美術教育研究に関する各々の問題点や課題が見えてきます。また、福田隆真委員による台湾との国際交流活動、フィリピンのデジタル・アート等担当教員からの交流希望を石川誠会員が紹介する記事など、アジアの美術教育に関する必読記事が集まりました。是非ともご高読の上、執筆者や本誌へご感想・ご意見・ご要望をお寄せください。



### 本学会と韓国学会における学術交流の経緯と現状および課題

■ 安東恭一郎 香川大学

韓国美術教育学会（以下、韓国学会）と大学美術教育学会（以下、本学会）が学術交流協定を締結（2003年度）してから今年で7年となるが、本報告では、当時相互の学会の発展を期待して協定交渉時に検討された事項を再掲すると共に、交流の現状と課題について考察する。

#### 1. 韓国学会との交流協定締結の前後関係

学術交流協定の締結は2002年度韓国から申し出があり、それに本学会が対応したのが始まりである。韓国学会から申し出があった背景には、当時、韓国では学会の国際化が学会公認の条件として強く求められていたこと、加えて当時大阪教育大学の長町充家教授が韓国で講演を精力的にこなしており、かつ長町教授が本学会理事長の任期期間中であつたことがあげられる。また当時、香川大学の安東は別の事案（韓国ソウル市の女子大学と香川大学との学術交流協定）に向けて作業をしていたので、この仕事に関連して韓国国際交流の窓口を担当した。

本学会としては、当時特に国際化の必要性を課題としていなかったが、国内発表・論文だけを扱うのでは

なく、学会の国際化はいずれ対応していかなければならない必然的なテーマではあった。

このことから2003年度の締結に向け、本学会は国内外を問わず初めて他の学会と学問を共有し、相互に発展していく方策・可能性について検討をすることとなった。

#### 2. 相互の研究が深化する学術交流の検討

学術協定書（MOU）は、基本的に本則と細則の二部から構成され、本則は「相互の発展に努力する」「共同研究を推進する」など一般論・理念が示され、具体的な交流内容については細則で検討される。本則である「学術交流をする」「相互に情報交流をする」といった理念については相互に意見の食い違いはなかったが、毎年開催される学会発表会や学会誌にそれをどう反映させるかという細則に関わる部分について相互に了解（確約）することはできなかった。この交渉時点では、具体的な取り組みを明示するのではなく、以下の3項目を努力目標（明文化したものではない）として設定した。

(1) 相互の学会発表（韓国は年2回開催）で、毎年相互の学会員の発表が慣例となるよう努力する。その際発表者に通訳をつけることが必要なので、発表時間を2倍とする。

(2) 学会誌に相互の学会員が投稿できるものとする。その際に行われる査読は、相互が属する学会で事前に審査し、審査を経た論文はそれぞれの学会に無条件で掲載されるものとする。掲載料金についてはその都度協議する。

(3) 美術教育研究の韓日合同の研究を積極的に推進していく。そのため相互に共同研究のテーマを担当する

委員を置き、相互に検討し、研究成果を相互の学会で共同発表する。また学会誌にも同様の内容をそれぞれの言語で掲載する。

### 3. 協定後実施できたこと

#### (1) 相互の学会発表

韓日学会学術交流協定締結を記念して、本学会の岡山大会で当時の韓国美術教育学会理事の講演会を開催した。また、相互の学会でも通訳を交え2倍の時間設定をして発表することはできなかったが、日本からも韓国の学会で研究発表（2005年7月に安東・石井、2006年7月に安東）をした。

#### (2) 個人研究の相互の学会誌への投稿で発表交流

個人研究を韓国学会誌に投稿（韓国語）、韓国での査読を経て掲載された（2005年および2006年に安東）。韓国からの投稿・掲載についてはもともと本学会には韓国の留学生や研究者が学会員として所属しているので、韓国籍の方からの投稿・掲載はあったが、韓国学会からの個人投稿が検討される場面はなかった。

#### (3) 共同研究の相互の学会誌への投稿で発表交流

韓日共同研究を行い、その成果を韓国学会誌で研究発表（2005年第19号第2報および第3報、韓国側はYi-Sung-DoおよびKim, Ji-Kyun、日本側は長町および安東）をした。

### 4. 問題の所在

締結後7年となるが、この実践的相互交流の状況は協定発足当時の勢いは減速気味となっている。学術交流を積極的に推進していくためには、個人の努力だけではなく、何より学術的な相互誘因性が求められる。すなわち、韓日それぞれで展開している研究内容の相互必要性が学術交流を動機付けるのである。

美術教育が既に純粋に理念として学問が形成されていれば、我々は国境を超えて自由に語り合うことが出来ようが、現在の美術教育は学校教育という国家制度と学校教育実践場面といった個別の内容を対象とすることを前提としている。言い換えると、美術教育が学校・制度を前提とする限りは、それぞれの異なる国家教育制度や教育内容を越えて学問形成をする動機を持ちにくいのである。

韓国の美術教育学会の制度や実態、研究の動機は一見日本とよく似ているように見えるが、実態はたいへん異なる。例えば、韓国学会では全体の研究テーマを学会の理事が会議で決定し、そのテーマに沿った論文が公募される。そしてテーマに沿った内容が研究大会で発表・論文採択されるしくみとなっている。

この方法から多様な内容は出にくいだが、今日の教育テーマに照準を当てた論考の共有が期待でき、しかも教育現場に研究内容を還元しやすい。韓国学会では本学会に比べ現場教師の参加者が非常に多いが、その理由は教育課程と研究内容が直接結びついており、最新の解説や理論と実践化について情報収集できる場面として学会が機能しているからである。

ちなみに2010年の韓国学会のテーマは、「視覚情報の

判断力育成と他文化理解・デジタル情報を用いた美術教育研究」と決められ、学会での発表内容は全て「デジタル文化と美術教育」に関連付けられたものであった。テーマ設定の背景は韓国・教育課程の示された内容を直接反映させたものである。

こうした韓国学会の状況に対し、2010年度武蔵野美術大学で開催された本学会テーマをすぐに思い出すことができる学会員は多くないだろう。仮に本大会テーマを「美術教育の明日を考える」と言い当てたとしても、この大会テーマから推測される研究内容は研究者個別の関心事から発想され、学会員同士が事前に研究内容を共有することは不可能である。あるいは、本学会で共通テーマを文科省の提唱する教育内容である「言語活動の充実」とか「共通事項の取り扱いについて」などとし、学会発表内容が全てこのテーマに沿った状況となることをイメージするのは難しいだろう。

このようなそれぞれの学会の立ち位置の相違が、お互いの学会を誘因しない背景となっているのである。

### 5. 国際交流における本学会の課題

2003年度に韓国学会と本学会が学術交流を締結した〈交流黎明期〉は、過去となった。現状のままでは発展は望めない。現在の課題は、それぞれの学会の特性をお互いが確認し、その上でお互いどのように関わっていけるのか、どのように協同していくことができるのかを改めて議論し、連携の在り方を再検討する〈相互協同性の再構築の時期〉だといえる。

韓国学会の運営ルールは本学会の現状には馴染みにくいように見えるが、韓国学会が用いている学会スタイル、つまり「研究主催者が大会テーマを設定」「テーマに沿った論文の公募」「公募から選ばれた論文が研究大会の発表（時にはフルペーパー、スケッチ、ポスターなど発表者のランク付け）」「特に優れた論文執筆者が全体会で講演」といった手順は国際学会ではむしろ定番となりつつある。

他領域・海外の学会と連携していくことは、他国・他学会を知る経験となるが、一方で自分たちの自明としてきた組織のルールや理念を改めて捉え直す機会ともなる。

本学会は特にここ数年の橋本光明前理事長の精力的なご努力と指導によってさまざまな改善を果たしてきた。また、国際交流委員会も山口喜雄委員長の尽力により毎年度2回本情報誌を編纂され、学会員に多少なりとも海外美術教育情報が行き渡るようになった。

本学会がこれから他学会と協同し国際化を目指していくならば、改めて本学会の学問領域における立ち位置を説明できる準備が必要とされている。われわれを取り巻く環境は、これまでの様々な立場から自由に美術を語り合うおおらかで牧歌的な時代から、社会的にどのような役割を果たし、何を貢献しようとしているのかを明確化すべき状況へとシフトしているのである。そして、本学会が学校制度に依拠しているのではなく実践場面・造形活動を根拠としながら「学」として成

立し、より多くの人々から求められる存在と成り得ることに気づき努力することが、本学会の国際化を実現していくことになるのである。



## 日韓美術教育学会 国際交流事情 中間報告

■ 鈴木幹雄 神戸大学

未だ全体像が明晰に把握できたものではありませんが、この間、ホームページ(以下、HP)と韓国からの留学生の協力を得て把握できた当方の予備調査を以下の通り報告致します。

### 1. 韓国の美術教育関連の主要学会は四つ

主なものは「韓国美術教育學會」(Eg.: Korea Art Education Association)と「韓国造形教育学会」(Eg.: The Society for Art Education of Korea、略称: SAEK)の2学会とされます。それ以外に「韓国国際美術教育学会」(Eg.: 略称: KoSEA)と「韓国芸術教育学会」(Eg.: Korean Society for Education through Art)があり、これら2学会は、InSEA、ユネスコ主催芸術教育コンフェレンス対応等、国の政策的な美術教育学会の性格をもったものと推定していますが、詳細な把握はまだできておりません。

### 2. 主要学会の一つ「韓国美術教育學會」

HP情報では、「美術教育に関する広範な理論と研究活動をはかる」ことをめざし、「多くの教育現場で成り立つ美術教育の質的向上を目的に1992年1月21日に設立された」学会で、「国際的には、InSEA、NAEA、日本大学美術教育学会と交流している」と広報されています。個人的聞き取りでは、「対象年齢は初等学校・中等学校、構成員は多様で単純には言えないが、教育大学校の人の割合が多い」とのことです(なお事務局電話番号は、TEL/FAX: 062-520-4184)。会長は、アルファベット表記で、Jung-Huwan PARK教授(広州教育大学校)(以下-同)、Yeong-Bang Lim教授(Seoul大学校)、副会長は、Chang-Seong O先生(Masan Bandong初等学校)、Seok-Won Lee先生(Mokdong中学校)、Ye-Sik Seo先生(CheongMyeong高教)、Ji-Seong jang先生(全州[Jeonju]教育大学校)、Keum-Hui An先生(京仁[Kyeongin]教育大学校)、Seong-Su Jeon先生(部蘆[Bucheon]大学校)です。国際交流委員会理事・委員長は Sun-A Kim 先生(ハンナン(韓南)学校)、委員は、Gyeong-Rae KO先生(Gyeongju Univ.)、Kyeong-Sun Kim先生(国民[Gukmin]大学校)、Jeong-Seon Kim先生(晉州[Jinju]教育大学校)、Ji-Kyun Kim先生(京仁[Kyeongin]教育大学校)、Hae-Gyeong Kim先生(京仁[Kyeongin]教育大学校)、Ji-Yeon Yang先生(同徳[Dongdeok]女大)、Eun-Jeok Lee先生(大邱[Daegu]教育大学校)です。なお、安東恭一郎先生と鈴木が面識のあるのは、Ji-Kyun Kim先生(京仁[Kyeongin]教育大学校)と、Gyeong-Rae KO(Gyeongju Univ.)です。

### 3. もう一つの主要学会「韓国造形教育学会」

個人チャンネルによる聞き取り情報によれば「対象年齢は子

どもから大人まで、構成員は美術教育の人から制作、美術史、美学の人まで、多様」とのことです(なお事務局電話番号は、TEL/FAX: 02-3277-3563)。会長は、Yong ROW教授(梨花女子大学、漢字名: 魯 龍)、副会長は、Seong-Kun CHO教授(極東大学)、国際関係委員会(Public and International Relations Committee)委員長は、Seon-A Kim(漢陽[Hanyang]大学校)、委員は、Kyeong-Sun Kim(国民[Gukmin]大学校)、Jeong-Seon Kim(晉州[Jinju]教育大学校)、Ji-Kyun Kim(京仁[Kyeongin]教育大学校)、Hae-Gyeong Kim(京仁[Kyeongin]教育大学校)、Ji-Yeon、Yang(同[Dongdeok]教大)、Eun-Jeok Lee(大邱[Daegu]教育大学校)、Ok-hui Jeong(Seokkwan中)、Hyang-Suk Hwang(慶北[Kyeongbuk]大学校)です。なお、藤江代表理事と鈴木が面識があるのは、Yong ROW教授(梨花女子大学、漢字名: 魯 龍)、Gyeong-Rae KO 先生(Gyeongju Univ.)、Hueri AHN先生(Kookmin Univ.国民大学)です。

### 4. 「韓国国際美術教育学会」

HP情報では、「InSEAの韓国支会」、『美術と教育Journal of Research in Art and Education』を発刊し、「韓国美術教育の質的向上に…寄与をしている」と広報されています。当方の推定では、InSEAの「韓国大会」の準備委員会、InSEA対応学会という性格を有しているものと思われます。

### 5. 補足

最後に「韓国芸術教育学会」は、「2002年10月20日、量定数教授(水原台)、リュテホ教授(高麗大)、バックズングル教授(国民大公演芸術センター)たちが、音楽、美術、演劇、舞踊の芸術教科を中核教育課程で採択している主要先進国の芸術教育政策」について「論議する集まりで始まった」もの、「2003年9月19日ソウル芸術の殿堂文化広間大会議室で韓国芸術教育学会及び学術シンポが開催された」と広報されています。

以上、簡単ではありますが、中間報告でした。調査者がハングル語ができないこともあり、間違いがあるかも知れませんが、その折はご指摘下さい。なお、私たち日本人がとかく理解の一助に求めるハングル語の漢字表記は、公文書表記ではなく、当事者の個人的意思決定事柄ということです。

## 台湾との最近の国際交流活動

■ 福田隆真 山口大学

最近の国際交流は、主に台湾の人々で行っています。2009年6月に、台湾の東華大学の林永利教授と台湾と日本の子どもたちの絵の紹介をした本を出版しました。『解析 台湾・日本 美術教育と児童画』(風和文化芸術有限公司)と題して、台湾と日本の小学生と中学生の絵を紹介しました。

台湾では東華大学のある花蓮県と台北の子どもたちの作品を採り上げ、日本では山口県と北海道の子どもたちの作品を掲載しました。台湾の中国語で記述していますので、中国語のできない私は漢字の拾い読みと通訳をしてもらいました。子どもたちの作品を直接比較することは難しいのですが、全体を見ていると、台

湾の子どもたちの特徴や個性も感じることができます。日本の子どもたちの作品を見ていただいて、台湾の先生方の参考になればよいと思います。

他には、山口大学と台湾の大葉大学、東海大学とが大学間協定を締結しているため、大葉大学の美術の学生を昨年度3名受け入れました。2009年8月に彼らは交流期間を終えて台湾に帰ったので、10月に訪問いたしました。芸術学部の学生でしたので、制作に対する意識が少しだけ強く、教育学部の学生には刺激になることがありました。今後は、山口大学の学生が台湾で交流作品展をすることを予定しています

## フィリピンからの交流希望

### ■ 石川 誠 京都教育大学

InSEAを通じての友人フィリピンのルーデス・サムソン (Loudes Samson) さんから交流の依頼があり、趣旨

と原文を記載します。同国のMiriam Collegeでデジタル・アートやグラフィックデザイン、アニメーションなどを扱う新学科の主任です。同様の内容を扱う日本の大学と交流 (使用言語: 英語) を希望しています。

Dear prof Makoto,

I mentioned to you in Rovaniemi that I chair a new department in our school. It is on applied arts which include digital art, graphic design and animation. Do you have a school in Japan that

I can link up to. I would like to establish a school partnership for my faculty and students with a school in Japan that handles animation, graphic designs. Thank you for your help.

regards, Lulu

直接本人 (Loudes K. Samson, Ph.D. Chairperson, Humanities / Foreign Language Department, Miriam College Email: lsamson@mc.edu.ph)、または石川誠 (京都教育大学: mishik@kyokyo-u.ac.jp) までご連絡ください。

[第2回のみ同報を2011年3月刊の本学会会報に掲載。以上、竹内とも子委員の記録を基に山口が記載]

## ■ 平成22年度 第2回国際交流委員会報告

日時: 2010年9月18日 (土) 13:00~14:25  
場所: 武蔵野美術大学12号館8F 第4会議室



出席: 10/全14名、左前左から甲田・浜本・仲瀬・竹内、後左から鈴木・池内・安東・長田・結城・山口の各委員  
議事: 次の4点について協議し、決定した。〔注: 事前に全委員へのメールで議事の委任を了承〕

1) 『国際交流情報第3号』編集内容の総括と反省: 本学会学術団体登録で「国際交流情報」の存在が、国際的な活動の証明として有効に働いたとの芳賀正之総務理事からの報告。文字ポイントが大きくなり、書籍用紙使用、印字配色等々が好評、さらに改善を望む。

3) 『第3号』藤江充理事長提案に対する協議  
2) 『第4号』編集内容の検討: ①鈴木・安東委員が理事長提案を受けて韓国美術教育事情、②長田委員が自己紹介を兼ね活動報告、③以後もグローバル化と伝統・文化を国際交流の視点で。

4) 他: ①将来は英文付『国際交流情報』にしたい。  
②大会時のため委員への交通費は無受給。

## ■ 第3回委員会は震災のため中止

### 「特集」案・記事のご応募を!

ご意見・ご感想、次号「特集」のご提案、記事や執筆者のご推薦やご応募もお待ちしております。迷惑メールとの区別のため「■国際交流情報■氏名」の見出しで、nobuoya@cc.utsunomiya-u.ac.jp山口喜雄宛に送信をお願いいたします。

### ■ 国際交流情報編集後記 ■

■会報や論集と同封での会員配布のため、当初12月予定が2011年3月まで刊行が延びたことをお詫びいたします。ご多忙中、11月中旬までに送稿して下さった安東恭一郎・鈴木幹雄・福田隆眞の各委員、嬉しい情報提供の石川誠会員に深謝いたします。

■宇都宮大学在室時に震度6強で山口研究室隣接出口の金属製梁が落ちましたが無事でした。停電や対応諸事を見かねて佐藤聡史事務部長が印刷業務を引き受けてくださり助かりました。感謝。

■原発の安全確保および早期の地震被災地復興と支援、次号の内容更新を祈念します。

山口喜雄: 宇都宮大学 (2011年早春)  
nobuoya@cc.utsunomiya-u.ac.jp